

鴻 koh

月刊俳句誌

令和2年7月1日発行

(毎月1回1日発行)

第15巻第7号 通巻169号

7 月号

2020

創刊14周年記念号



おふおふと陽炎の立つ太宰の地

座すによき切株のあり水鶏鳴く

蘆原へまつさかさまの菖雀

旧家一軒門前の田の植ゑ終る

いくたびも見て郭公の声ばかり

茶どころへ来ての八十八夜摘

籠り居の矢車草の花の数

コロナウイルスつつんと松の芯

愛鳥週間ならば一人で森へゆく

竹皮を脱ぎ晩年の見えにけり

新宿のからつぼとなる修司の忌

人恋ふや草笛を吹き草矢打ち

蛸蚪は湧くべし句作りは深むべし

人恋し

主宰作品

増成栗人

荒川心星

大和歌

大和歌の淡き墨色花に雨
桃咲いて水音ゆたかにしてゐたり
月おぼろ釈迦堂に灯が二つ点く
吉良の地の瀬音風音龍天に
落椿また落椿雨しとど
建国日林中に日の満ちてくる
砂浜の鳥の足跡うららけし
日暮れにはまだ間のありと水鶏鳴く

定位置の母笑む写真さくらの夜

踏まぬやう渡しの跡のクローバー

花過ぎの川面いつもの親しさに

魚跳ねて八十八夜の水の音

歩を伸ばすなんぢやもんぢやの花の風

青空のどこかさびしげ半仙戯

濡るるかに出でしばかりの茅花の穂

薔薇へ水空へシートを広げ干す

さくらの夜

半谷洋子

『八月や六日九日十五日』
『〈八月や六日九日十五日〉のその後』

小林良作・著 「鴻」出版局・刊

今年も八月が近づいてまいりました。
「鴻」から俳壇へ送り出したこの2冊をもう一度読んでみませんか。
面白いです。オススメです!!

まだお持ちでない方は2冊セットで1000円です。(送料込み)
封書で、お名前・ご住所・電話番号を書いた便箋と1000円を
同封の上、「鴻」発行所へお申し込みください。

「鴻」発行所 〒271-0087
千葉県松戸市三矢小台2-4-16 谷口方
Tel 047-363-4508 fax 047-366-5110

谷口摩耶

花檣

花檣手児奈の里に降り積もる
鴨足草ゆきのした真間川沿ひを夫と行く
コーヒーフロート一気に飲んで新樹光
誰も居ぬ薔薇のアーチの向う側
クローバーの花の冠走りくる
つつじ溢れて駅前のロータリー
タクシーを逃してしまひ竹落葉
新茶汲む離れし子らを思ひつつ

第十四回「鴻」賞 受賞作品

かたときの風

荒井一代

川辺りを鴛鴦の番の離れざる
母小さし旧正の日の中に置く
寒紅梅山の日差しのゆるやかに
雛の日をきのふに雨のやさしかり
花木五倍子瀬音に耳を傾けて
みかへりの弥陀に卯の花曇りかな
回廊のほのとみどりに夏兆す



妻籠本陣青梅のころころと
寒山拾得定家葛の花匂ふ
狐の剃刀したたかに雨がくる
かたときの風とつくつく法師かな
しろがねの花のすすきとなる夕べ
日はゆるやかに墳山と柿の山
鬼の子に吹きつさらしの宵の来る
ぎんなんの降りあたらしき竹箒
朴落葉掃き寄せて聞く山の声

第四回「鴻」特別功労賞 受賞作品

観音の手

良知悦郎

木の芽風観音の手の大き印
田の鼓動畦火の強き辺りより
末黒野は新しさ生む色であり
雨あとの雲雀の空となりにけり
遠きほど植田のみどり濃くなりぬ
揺るとは明日ある証藤の花
新緑の堰を越えたる山の音



崩るるも牡丹の容山の晴
子規庵に尾花の一穂あれば足る
山の日の月は容を整へて
秋茗荷水辺の風の重さうに
木の実降る山河の眠り誘ふごと
遠富士が冬の山河を鎮めけり
冬將軍小川は音を細くして
歳時記もケースに戻し年の暮
初明りたつぷりと溜め潦

第二回「鴻」特別賞 受賞作品

夏の鴨

岩崎 俊

うすうすと日は坂道に雪螢
小春日の終りを風の笛が告ぐ
寒日とおのれの影を日時計に
ストーブの炎ひと日の終るとき
春の雪動かぬものを包みゆく
鳶の春蒼天はなほ上にあり
一本の藁を銜へてつばくらめ



切通しむらさきはなな降るやうに
筍を切る音やさし夕厨
それぞれに早苗田を見てすれ違ふ
ゆふさりの一羽か二羽か夏の鴨
神域の一木の揺れ祭笛
鳴かずして空を見てゐる秋の蟬
流されて停まりて風の秋あかね
その中に夕日を容れて秋の雲
朝霧やとほく雨戸を開ける音

第十四回「鴻」新人賞 受賞作品

星飛んで

山岸明子

月出でよ行けど行けども芒原
ポストへの道やはらかき月明り
星飛んで音なき調べ広がれり
いてふ散る無声映画を観るごとく
朴落葉ややあけてまた朴落葉
夕焼小焼微動だにせぬ冬木立
クッキーのバターの香り冬ぬくし



冬薔薇のきりりと杉田久女の忌
門灯のぼうと今宵は雪となる
風に乗りもくれん白き鳥となれ
また一つ訃報辛夷は満開に
黄昏の色となりたる濃紫陽花
笹舟のたゆたうてゐる星祭
瑠璃蜥蜴墓石を瞬時かがやかす
夏蝶の真白き花に紛れゆく
考へる人にやさしき処暑の雨



「両国・芥川の空気銃と大銀杏」 鈴木 崇

JR両国駅西口から国技館通りを回向院がわに向かつて交通量の多い京葉道路に出ると、道沿いに「芥川龍之介生育の地」のプレートがある。

芥川龍之介は、母の発病のため生後八月目で本所に住んでいた母の長兄・芥川道章に引き取られた。

本所は両国橋の川向こうの一带、この地で芥川は十八年間を過ごした。当時の本所は閑雅な土地柄で、江戸の面影を残していたという。

幼年の芥川少年は回向院の広場や町中に残る野原で遊び暮らした。空気銃を肩に雑木林を踏み歩き、回向院の大銀杏に登ったりするのも楽しみの一つであった。後年、木登りする映像が残されているが、得意だったのだろうか。

芥川の広範な知識が培われたのも本所の貸本屋である。

「僕はこういう間にも、夏の西日のさしこんだ、狭苦しい店を忘れることは出来

ぬ。軒先には硝子の風鈴が一つ、だらりと

短尺をぶら下げていた。それから壁には何百とも知れぬ講談の速記本がつまっていた。最後に古い葺戸のかけには梅干を貼った婆さんが一人、内職の花簪を拵えている。――ああ、ぼくはあの貸本屋に何という懐かしさを感じるのであろう。僕に文芸を教えたものは大学でもなければ図書館でもない。正にあの蕭条たる貸本屋である。」

「僻見」より

芥川は千句を超える句を遺している。芭蕉を崇敬し、好んで古調を用いた。蕉風に倣って「俳句」と呼ばず「発句」と敢えて使っていた。高踏的なこだわりが芥川らしい。

炭の火も息するさまよ夕まぐれ

線香を干したところへ桐一葉

切支丹坂は急なる寒さ哉

何気ないスケッチの句が印象的だ。「切支丹坂」の句は、芥川にキリシタン物の小説群があるだけに味わい深い。

荒るる海に鷗とび甲板のラシャメン



両国・回向院の大銀杏

時亨新報社の暗き壁に世界図

中国視察時の手帳に遺されていた句のうちから。珍しく破調や外来語が多く、異色の作となっている。新傾向俳句にも表現の可能性があったのではと思わせる。

上海から養父・道章に送った手紙の追伸にこんな一節がある。

「この間家へかえった夢を見ました。本所の家でした。義ちゃんが来ていました。皆が幽霊だと云って逃げました。伯母さんは逃げませんでした。眼がさめたら悲しくなりました。」

早すぎる晩年の芥川は心身の衰えと強迫観念に苦しめられていた。

芥川にとって伯母・フキは人格形成に大きな影響を与えた一人だった。「伯母がいなかったら今日のような私が出来たかどうか分かりません」と書き残している。



羽音集

増成栗人 選



大阪 遠藤 泉

船橋 藤原明美

流山 中内敏夫

俳誌のサロン

松戸 吉清和代

先がけて白木蓮が満開に
親亀子亀うつらうつらと桜どき
五羽六羽春の雀が歌ひ出す
ライトアップされて池畔の花見どき
春一番送電塔が野の涯に
飛花落花して里山に昼がくる
遠富士をなかば隠せる春霞
子らの網逃れて蝌蚪の浮き沈み
籠りあるとき鳥どちの帰るとき
雲雀笛弱音は吐かず背伸びせず
庭先に十本ほどの黄水仙
筑波嶺を鶯の声渡りけり
ジヨギングの一人二人が花菜畑
筑波二峰引き裂くごとく春の雷
夕どきの風の作れる花筏
縛られ地蔵縄のぶらつく日永かな
花種時く綺麗な砂を少し混ぜ
鳥帰る東京駅の 大時計
初蝶の触れたる草の差ぢらひぬ
変りなき暮らし大事に木の芽風

俳誌のサロン

栗庵閑話

虫丸



<http://www.haisi.com/koh/index.htm>